地域福祉を考えるシンポジウム

昨年、11月17日に尾西庁舎6階大ホールにて、「地域福祉を考えるシンポジウム」を開催し218名の皆様にご来場いただきました。

◆会長あいさつ

超高齢社会の進展、核家族化また地域の絆が低下する中で新たな福祉課題が生じている。それに対応するためには行政や社会福祉協議会などの公的支援を中心としながらも、地域社会全体での支え合い活動の取り組みを進めることが必要であり、当協議会としても「安心して・住みやすいまち・いちのみや」を目指して関係機関と連携しながら事業展開をしていきたいとの話がありました。

◆基調講演　日本福祉大学 原田正樹教授

主な内容は、

①2025年問題。10年後には75歳から77歳の方が増加。また、65歳以上の2割の方が要介護となる。あとの8割の方は、※健康寿命をどう延ばしていくか。これからの地域福祉は「予防に力を入れていく時代」

※健康寿命とは、健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間。

②要支援1・2に認定された方は、これまで介護保険の中でサービスを受けてきたが、今後は在宅のまま、地域で生活ができるようにというのが今回の改正介護保険。中学校単位（一宮市では連区単位）で地域包括ケアシステムを作り上げていくことが必要。このシステムは、生活上の安全・安心・健康を確保するために、医療や介護の他、福祉サービスを含めた様々な生活支援サービスが日常暮らす場で適切に提供できるような地域における体制のこと。施設入所できるのは、原則要介護3以上の方となるため、例えば、一人暮らしで認知症（要介護2）の方を地域で支えられるかどうか。

③右上三角図一番下の「環境醸成」の意味は、住民の福祉に対する意識のことで、これはお金をかけてもすぐに高めることができない。地域福祉は総合性をもっており、ご近所の目や偏見といった障壁を取り払いながら三角形の土台となる「環境醸成」をしっかり築いていくことで、安定的な「直接対人援助サービス」「ケアマネジメント」の確保、さらには提供につながっていく。

以上、地域福祉について、わかり易くお話をしていただきました。

◆パネルディスカッション（要旨）

【左側写真の右から】杉山勝治氏（神山支会長）、北川登氏（朝日支会長）、小平明美氏（木曽川町支会評議員）、丹菊佳代氏（ボランティアセンター運営委員長）の4人から地域における活動発表をしていただきました。「サロン活動」「七夕飾り」「清掃活動」「募金」「福祉講演会」「広報紙の発行」「ボランティア活動」「ボランティアセンターの活動」等の取り組み事例をお話しいただき、横のつながりや地域の活性化をしていかなくてはならないとの発表がありました。

【右側写真の左から】コメンテーターの近藤太康氏（民生児童委員会長連絡協議会副会長）、江口英機氏（西成連区地域づくり協議会会長）、滝藤京子氏（市役所福祉こども部）、小川一典（社会福祉協議会事務局長）から「それぞれの地域に合った活動が大事」「無縁社会の根絶」「予防に取り組む必要性」「地域やボランティアを含め総括的につなぐ事が大事」とコメントをいただきました。

原田教授のまとめ

地域福祉は、一朝一夕にはできない。長い時間取り組んで、ようやく一歩前に出るもの。ここで取り組むか否かで5年、10年先に地域差がでてくる。今日は最初の一歩。皆様からのご意見を地域へ持ち帰って、ぜひ“作戦会議”を開いていただきたい。

今回のシンポジウムで改めて地域の特色を発見し、来場者の皆様と共有することができたことは、今後の一宮の福祉をより高める上で大きなステップとなりました。